

中学生における学業成績と学習意欲の関係 *

杉 村 健 ・ 清 水 益 治 **

(心理学教室)

要旨：FIGHT日本文式学習意欲診断検査を用いて、中学生の学習意欲と学業成績の関係調べた。学習意欲の現れ方では集中力、回復力、および学習への主体性が学業成績と関係が深かった。持続力は男子の学業成績と関係があった。学習意欲の要因では学習達成動機、学習への興味、学習への価値感が学業成績と関係があったが、学習の自己能力感は関係がなかった。学習意欲を支える要因としては答案の利用法が学業成績と関係が深かった。

キーワード：学業成績、学習意欲、答案の利用法

本研究の目的は中学生の学習意欲を診断するために作成されたFIGHT日本文式学習意欲診断検査（松原・橋川・犬塚，1985—以下FIGHTと略す）を用いて、中学生の学習意欲と学業成績の関係を分析することである。

上田・杉村・玉瀬（1977）は小学校3・4年生、5・6年生、中学生に奈良県障害児学校・学級放送教育研究会（1975）の作成した学習意欲調査を行った。この調査は、①新しいことに自発的に取り組む内発的意欲、②困難なことを最後までやりとげる達成意欲、③計画を立てて実行する計画性と実行意欲のそれぞれを調べる調査項目10項目ずつからなり、各項目については“はい・いつも”、“はい・ときどき”、“いいえ”の3件法で回答を求めるものである。その結果、全教科、知的教科、技能的教科の学業成績の高い者と低い者の学習意欲を比較したところ、3・4年生では学業成績による差はみられなかったが、5・6年生では全教科と知的教科において、中学生では全教科、知的教科、技能的教科のいずれにおいても学業成績の高い者の方が低い者よりも、3つの意欲のいずれも高かった。このことから学年が進むにつれて、学業成績と学習意欲は有意に関係するようになり、中学生では学業成績の高い者は、達成意欲、内発的意欲、計画性と実行意欲のいずれも高いことがわかる。

杉村（1982）は小学校2年生、4年生、6年生に前述の調査を実施し、学習意欲の高い者と低い者について、各教科の成績を比較した。その結果、内発的意欲が高い者は、低い者よりも、4年生では国語、6年生では理科を除く全ての教科で有意に高い成績を示した。達成意欲の高い者

* Relationships Between Academic Achievements and Motivation for School Work in Junior High School Students

** Takeshi Sugimura and Masuharu Shimizu (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

は低い者よりも、2年生では国語、6年生では国語、算数、社会で有意に高い成績を示した。また計画性と実行意欲の高い者は低い者よりも、2年生では国語、6年生では社会と算数で有意に高い成績であった。このことから杉村は内発的意欲は小学校を通じて学業成績にかかわる強力な要因であり、達成意欲、および計画性と実行意欲は高学年の学業成績に関係する意欲の要因であると結論した。

次にFIGHTを用いた研究では、山口（1985）が英語の成績と集中力、数学、理科の成績と持続力、国語、社会、および技能的科目の成績と学習に対する主体性の間に、それぞれ関係があると述べているが、詳細な数値はない。生井（1986）と生井・小松崎（1987 a, 1987 b）もFIGHTを用いて、学習意欲と学業成績の関係を調べてはいるが、個人ごとの資料が中心で統計的な分析は行っていない。

そこで本研究では中学生における学業成績と学習意欲のより確かな関係を明らかにするために、FIGHTを用いて両者の関係を統計的に分析する。また上田ら（1977）の研究では性差についてはふれていなかったが、本研究では男女別に分析を行うことにより、学業成績と学習意欲の関係における性差についても合わせて検討する。

方 法

調査対象 調査対象は奈良県下の中学校2年生 193名（男児87名、女児96名）であった。

調査内容 (1) 学習意欲——FIGHT日文式学習意欲診断検査を用いた。この検査は質問紙法で、第1部学習意欲検査、第2部学習意欲を支える要因、第3部付帯調査の3部からなり、本研究の関心である学習意欲検査と学習意欲を支える要因についての内容は以下の通りである。

学習意欲検査——意欲の現れ方と学習意欲の要因の2つの側面を調べる検査からなる。意欲の現れ方は次の4領域について5段階で評定する。

① 学習への主体性：自分で立てた計画の実行やその結果に対する自己責任性、判断の内的基準、授業場面での積極性などから測定された学習活動を積極的に行なう態度。

② 集中力：周囲の雑音に対する耐性、大切な場面での注意集中、誘惑への抵抗などから測定されたある課題に対して集中的に注意を向ける能力および態度。

③ 持続力：満足の遅延、目標達成に向けてのマイペースの学習、飽和耐性などから測定されたもので、ある目標に向かい、一定の学習活動や計画を、長時間または長期間続ける能力および態度。

④ 回復力：失敗に対する耐性、スランプからの脱出、将来の展望の保持などから測定されるもので、順調に進行していた学習活動が、何らかの障害によってその進行が妨げられたとしても、意欲を失わずに学習を続ける能力および態度。

次に学習意欲の要因は次の4領域について5段階で評定する。

① 学習への興味：わかることの楽しさ、学ぶ楽しさ、発見体験、教科の好き嫌いの有無などから測定された学習への興味・関心の強さ。

② 学習への価値感：学習することの目的理解、誰のための学習か、学習への自覚などから測

定する学習活動の必要感・自我関与度。

③ 学習達成動機：自分の学習目標の設定方法、困難な課題への挑戦、結果の冷静な反省による自己水準の確認などから測定するもので、できるだけ高度の学習目標を達成しようとする動機。

④ 学習の自己能力感：成功および失敗場面での原因帰属を測定するもので、自分には能力が備わっているという感じ（自信）。

学習意欲を支える要因——学習意欲を背後から支える要因として、次の7領域、13尺度を3段階で評定する。

① 一般的興味：学習への興味が出現する基礎となる一般的な活動や対象に対する興味・関心の強さを示す。

② 自主性：学習活動以外の場面での自主的・自発的行動傾向の強さを示す。

③ 健康度：精神的な疲労感、生活の規則性、身体的悩みなどから測定した精神的健康度。

④ 対人関係：仲間はずれ、友人に対する好悪感情、相談相手の有無から、友人関係を測定する。

⑤ 保護者の養育態度：家庭環境（心理的環境）を測定する領域であり、家庭の雰囲気、過干渉傾向、過保護傾向の3尺度からなる。

⑥ 性格：学習意欲そのもの、または意欲と学業成績の関係を阻害する精神的健康要因を測定するもので、劣等感、不安傾向、気分の変化の3尺度からなる。

⑦ 学習技術：意欲と学業成績との媒介をする学習技術を測定するもので、家庭での学習習慣、授業の受け方、答案の利用法の3尺度からなる。

(2) 学業成績——昭和61年度1学期の成績。国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術家庭、英語の9教科について、全て5段階で評定されたものである。

手続き 学習意欲調査は昭和61年7月に本学の心理学専攻の大学院生及び4回生によって各教室で実施された。

結 果 と 考 察

全教科、知的教科（国語、社会、数学、理科、外国語）、および技能的教科（音楽、美術、保健体育、技術家庭）のそれぞれについて、評定値の合計が高い者から男女各20名を成績上位群とし、低い者から男女各20名を成績下位群とした。これらは男子では全体の約23%、女子では約21%にあたる。

表1は成績上位群と下位群の「学習意欲の現れ方」についての評定値の平均と標準偏差、上位群の平均値から下位群のそれを引いた差、およびt検定の結果を示したものである。

集中心はいずれの教科でも男女ともに上位群の方が下位群よりも有意に高い値であり、上位群の者は下位群の者と比べて、「1つの問題や一定の活動に対して、集中的に注意を向ける能力および態度」が身につけているといえる。学習への主体性は女子の技能的教科を除き、回復力は男子の知的教科を除き、すべて上位群の方が下位群よりも有意に高かった。このように「学習活動を積極的に行う態度」と「学習活動が何らかの障害によって妨げられても、意欲を失わずに学習

を続ける能力および態度」も学業成績と関係が深い。持続力は男子の知的教科および技能的教科において成績上位群の方が下位群よりも有意に高かった。したがって、男子では「ある目標に向かい、一定の学習活動や計画を長時間、又は長期間続ける能力および態度」が学業成績と有意に関係している。女子では標本値は上位群の方が高いが、有意差は見られなかったので、持続力は女子よりも男子の学業成績と関係が深いことが示唆される。

表1 学業成績上位群と下位群の「学習意欲の現れ方」の平均（標準偏差）

| | | 全教科 | | 知的教科 | | 技能的教科 | |
|-------------|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 学習への 主体性 | 上位群 | 3.90 (1.14) | 3.65 (0.73) | 3.95 (1.12) | 3.70 (0.78) | 4.05 (0.97) | 3.50 (0.74) |
| | 下位群 | 2.65 (1.01) | 3.05 (0.80) | 2.65 (1.01) | 3.00 (0.84) | 2.55 (1.07) | 3.00 (0.84) |
| | 差 | 1.25 ** | 0.60 * | 1.30 ** | 0.70 * | 1.50 ** | 0.50 |
| 集中力 | 上位群 | 3.80 (1.08) | 3.65 (1.24) | 3.70 (1.14) | 3.60 (1.20) | 3.95 (1.02) | 3.55 (1.20) |
| | 下位群 | 2.75 (1.13) | 2.85 (0.73) | 2.70 (1.10) | 2.85 (0.73) | 2.70 (1.05) | 2.85 (0.79) |
| | 差 | 1.05 ** | 0.80 * | 1.00 ** | 0.75 * | 1.25 ** | 0.70 * |
| 持続力 | 上位群 | 3.50 (0.97) | 3.40 (0.73) | 3.55 (0.92) | 3.40 (0.80) | 3.65 (0.96) | 3.45 (0.80) |
| | 下位群 | 2.80 (1.17) | 2.85 (0.96) | 2.75 (1.13) | 2.90 (0.94) | 2.75 (1.18) | 2.95 (0.92) |
| | 差 | 0.70 | 0.55 | 0.80 * | 0.50 | 0.90 * | 0.50 |
| 回復力 | 上位群 | 3.65 (1.06) | 3.40 (0.92) | 3.45 (1.20) | 3.40 (0.92) | 3.75 (0.99) | 3.40 (1.07) |
| | 下位群 | 2.85 (1.28) | 2.65 (1.15) | 2.80 (1.25) | 2.50 (1.16) | 2.95 (1.28) | 2.50 (1.20) |
| | 差 | 0.80 * | 0.75 * | 0.65 | 0.90 * | 0.80 * | 0.90 * |

(注) t 検定の $df = 38$, * $p < .05$ ** $p < .01$

全教科では、男女ともに学習の主体性、集中力、回復力において有意差があり、これらは持続力よりも学業成績に大きな影響を与えることが示唆される。知的教科をみると、男子では学習への主体性、集中力、持続力において有意差があり、女子では学習への主体性、集中力、回復力に有意差があった。このことから、男子では回復力よりも持続力が、女子では逆に持続力よりも回復力の方が知的教科の学業成績と関係があるといえる。技能的教科では、男子においては学習への主体性、集中力、持続力、回復力のいずれにおいても有意であったが、女子では集中力と回復力においてのみ有意であった。技能的教科の成績と学習意欲の現れ方の関係は女子よりも男子の方が強いことが示唆される。

表2は成績上位群と下位群の「学習意欲の要因」の平均と標準偏差、上位群と下位群の差、および t 検定の結果を示したものである。学習達成動機では男女ともいずれの教科でも有意であり、学習への価値感と学習への興味でも男女ともにほとんどの教科で有意差が見られた。また有意差の見られなかった教科も、評定値では上位群の方が下位群よりも高かった。このように、「でき

るだけ高度の学習目標を達成しようとする動機」、「学習活動の必要感・自我関与度」、および「学習への興味・関心の強さ」はいずれも学業成績と強く関係している。

表2 学業成績上位群と下位群の「学習意欲の要因」の平均（標準偏差）

| | | 全 教 科 | | 知 的 教 科 | | 技能的教科 | |
|------------------|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 学 習 へ の 興 味 | 上位群 | 3.35 (1.11) | 3.55 (0.67) | 3.45 (1.07) | 3.55 (0.67) | 3.45 (1.12) | 3.45 (0.74) |
| | 下位群 | 2.65 (1.24) | 2.55 (0.92) | 2.55 (1.20) | 2.55 (0.92) | 2.60 (1.20) | 2.75 (0.99) |
| | 差 | 0.70 | 1.00 ** | 0.90 * | 1.00 ** | 0.85 * | 0.70 ** |
| 学 習 へ の 価 値 感 | 上位群 | 3.60 (1.02) | 3.35 (0.91) | 3.75 (0.99) | 3.35 (0.91) | 3.60 (0.97) | 3.45 (0.97) |
| | 下位群 | 2.65 (1.28) | 2.70 (1.19) | 2.70 (1.31) | 2.55 (1.20) | 2.65 (1.28) | 2.55 (1.12) |
| | 差 | 0.95 * | 0.65 | 1.05 ** | 0.80 * | 0.95 * | 0.90 * |
| 学 習 達 成 動 機 | 上位群 | 3.80 (0.87) | 3.65 (0.91) | 3.85 (0.85) | 3.70 (0.90) | 3.90 (0.89) | 3.60 (0.86) |
| | 下位群 | 2.55 (1.02) | 2.50 (0.87) | 2.55 (1.02) | 2.50 (0.87) | 2.55 (1.02) | 2.65 (0.85) |
| | 差 | 1.25 ** | 1.15 ** | 1.30 ** | 1.20 ** | 1.35 ** | 0.95 ** |
| 学 習 の 自己能力感 | 上位群 | 3.35 (1.19) | 3.35 (0.79) | 3.10 (1.22) | 3.40 (0.86) | 3.45 (1.12) | 3.25 (0.94) |
| | 下位群 | 3.05 (1.28) | 3.45 (0.59) | 2.95 (1.28) | 3.35 (0.65) | 2.90 (1.14) | 3.55 (0.50) |
| | 差 | 0.30 | -0.10 | 0.15 | 0.05 | 0.55 | -0.30 |

(注) t 検定の $df = 38$, * $p < .05$ ** $p < .01$

しかしながら、学習の自己能力感では両群の間に全く有意差が見られず、しかも女子の全教科と技能的教科では学業成績下位群の方が上位群よりも高かった。この自己能力感は、「成功および失敗場面での原因を能力に帰属するか、努力に帰属するかによって測定された自分には能力が備わっているという感じ」であるので、成功や失敗の原因を能力に帰属するか努力に帰属するかは、学業成績と関係がないといえる。

表3は学業成績と「学習意欲を支える要因」の関係を調べるために行った2（上位群、下位群）×3（望ましくない、ふつう、望ましい）の χ^2 検定の結果を示したものである。有意差のあった尺度は、成績上位群の方が下位群よりも望ましいと回答した者が多いか、望ましくないと回答した者が少ないことを示す。

答案の利用法では、いずれの教科においても男女ともに成績上位群の方が、下位群よりも望ましい回答をした人が多かった。したがって、「答案をかえされたら、かならず見直し、同じ誤りをしないようにする」というような学習技術は学業成績に反映される。しかし、同じ学習技術でも授業の受け方は男子の知的教科でのみ有意であり、家庭での学習習慣には1つも有意差がなかった。杉村・井上・豊田（1986）は学業成績が高い小学生は家庭の学習習慣や授業の受け方がよいことを見出している。両者のちがいは、子どもの年令のちがい、および質問項目のちがいによる

ものかもしれないが、少なくともFIGHTに関しては、中学生の家庭での学習習慣と授業の受け方は成績とはあまり関係がない。

表3 学業成績と「学習意欲を支える要因」の関係 (χ^2 検定, $df=2$)

| | | 一般的 興味 | 自主 性 | 健康 度 | 対人 関係 | 家庭 の雰囲気 | 過干 渉傾向 | 過保 護傾向 | 劣 等 感 | 不安 傾向 | 気分 の 変化 | 家庭 学習の 習慣 | 授業 の受け 方 | 答案 の 利用 法 |
|-------|---|-----------|---------|---------|----------|------------|-----------|-----------|-------------|----------|---------------|-----------------|----------------|--------------------|
| 全教科 | 男 | ** | | | | | * | | | | | | | ** |
| | 女 | | * | | | ** | | * | | | | | | ** |
| 知的教科 | 男 | * | | | | | | | | | | | * | ** |
| | 女 | | * | | | ** | | | | | | | | ** |
| 技能的教科 | 男 | | | | | | ** | | * | | | | | ** |
| | 女 | | * | | | ** | | | | | | | | ** |

* $p < .05$, ** $p < .01$

興味深いのは、男子では一般的興味と過干渉傾向、女子では自主性と家庭の雰囲気が学業成績と有意に関係したことである。男子では「一般的な活動や対象に対する興味・関心を強める」ことや「勉強のことをうるさく言う」ような過干渉傾向を減らすことが学業成績の向上につながり、女子では「学習活動以外での自主的・自発的行動傾向」を強めたり、「家の人とよく話をする」というような家庭の雰囲気をよくすることが学業成績の向上につながると考えられる。

要 約

FIGHT日文字学習意欲診断検査を用いて、中学生における全教科、知的教科、技能的教科の学業成績と学習意欲の現れ方、学習意欲の要因、および学習意欲を支える要因との関係を男女別に調べた。

(1) 学習意欲の現れ方について、集中力はいずれの教科でも、男女ともに成績上位群の方が下位群よりも有意に高かった。持続力は男子では知的教科と技能的教科の成績上位群の方が下位群よりも有意に高かったが、女子では有意差はみられなかった。

(2) 学習意欲の要因について、学習達成動機はいずれの教科でも、男女ともに成績上位群の方が下位群よりも有意に高かった。学習への興味と学習への価値感も、成績上位群の方が下位群よりも高かったが、学習の自己能力感では差がなかった。

(3) 学習意欲を支える要因について、答案の利用法はいずれの教科でも、男女ともに成績上位群の方が下位群よりも有意に良かった。男子では成績上位群の方が下位群よりも一般的興味が有意に高く、過干渉傾向が有意に少なかった。女子では成績上位群の方が下位群よりも自主性が高

く、家庭の雰囲気は有意によかった。

引用文献

- 生井善秋 1986 学習意欲と学業成績の関係 心理測定ジャーナル, 22, 4, 2-6.
- 生井善秋・小松崎聡 1987 (a) 学習意欲が学業成績に及ぼす影響とその要因 (I) 心理測定ジャーナル, 23, 3, 7-14.
- 生井善秋・小松崎聡 1987 (b) 学習意欲が学業成績に及ぼす影響とその要因 (II) 心理測定ジャーナル, 23, 4, 8-15.
- 松原達哉・橘川真彦・犬塚文雄 1985 日文化学習意欲診断検査 (FIGHT) 教師用手引 資料の見方と結果の利用 日本文化科学社
- 杉村健 1982 小学生における学習意欲、知能および学業成績 奈良教育大学教育研究所紀要, 18, 101-108.
- 杉村健・井上登世子・豊田弘司 1986 小学生における学習習慣と学業成績の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 22, 43-57.
- 上田敏見・杉村健・玉瀬耕治 1977 へき地における児童・生徒の学習意欲と学習適性 奈良教育大学教育研究所紀要, 13, 63-70.
- 山口美保 1985 学習意欲と学業成績 教育心理 33, 5, 370-372.

＜付記＞ 資料の収集にあたり、奈良県郡山市立東中学校の御協力を得ました。厚く感謝致します。